1427号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2023.12.18
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

空き家　5

木幡智恵美

生家の行く末⑥

数年前、茨城の叔母宅を訪れた際、毎朝の犬の散歩に出る叔父と近所を歩いていた時のこと。随分前に来たことのあるいかにもニュータウンといった住宅地に行って驚いた。「おらの居た会社のもんも、ここにいっぺおるで」と言っていたそこに人気はなく、ゴーストタウンのようになっている。叔父が、「わけもんたちゃ、あそこに出来た住宅におる」と、少し離れた新しい住宅地を指さす。老齢となった住人はどうなったのだろう、施設にでも入ったのか、子どもに引き取られたのだろうか。マイホームを夢見、子どものためにああしよう、自分たちも楽しむためにこうしようとワクワクしながら構想し、ローンを組み、懸命に働いて建てただろうというのに、家は老朽化、住人も老齢化、深閑とした建物だけが残る。道路に散らばる落ち葉を踏みながら、空しい思いを抱えて叔父の後をついて歩いた。

ＮＨＫで特集していた「空き家」で、長く放置した家の持ち主を取材していた。東京の都心部の例では、まず相続権についての確認。以前届いた相続権放棄の手紙を思い出す。取材を受けていた人は、一人一人に当たって相続放棄に同意してもらっていた。その後に残ったのが最大の問題、家への断ち切れぬ思いだ。写真を眺め、あれこれ葛藤の末、リフォームして貸し出すことに決める。そのリフォームというのが、貸す方でなく、借りる方がし、その分借り賃を安くするというもの。家の特徴を生かしながら、フォトスタジオとして有効利用され、貸し手も借り手も両方が満足できるものになっていた。

うちの生家ほどの古い家でも、リフォームすれば使ってもらえるのだろうか。従兄があと三十年くらいは大丈夫と言っていたけど、それでは買い手はつかないか。しかし、解体ということには…、断ち切れぬ思いがありすぎるし…。

散歩コースで毎日解体の様子を見ていた広い屋敷は一旦更地となり、今は家が建っている。二軒はもう人が住み、さらに二軒が建設中だ。近所で一昨年更地になったところも今月に入り工事が始まった。

がらがら橋日記

宮森健次

わっはっはのおばさん

ぼくがちょうど今落語の稽古に通ってくる子どもたち、つまり小学校の一年生ぐらいのころ、東奥谷の実家にはほとんど毎日母の茶飲み友達たちが入れ替わり立ち替わり来ていた。中学、高校と進んでもやっぱり来ていた。ずっとそうだったので、どこの家でもそうなのだと思っていた。丸いちゃぶ台に置かれた急須、湯飲み、菓子皿は常時出番待ちの状態で、おばさんたちが来ると、ぼくもいっしょにお茶を飲みまんじゅうを食べた。おばさんたちはよく笑った。話はまるで聞いていなかったが、笑い声が響いている家は心地よかった。

中にひときわ大きな笑い声のおばさんがいて、ぼくはその人のことを「わっはっはのおばさん」と呼んでいた。そのうち母まで、「今日は誰が来た？」と聞くと「わっはっはのおばさん。」と答えるようになった。わっはっはのおばさんは、よくぼくに話しかけて、大まじめなぼくの答えをやっぱりわっはっはと笑った。ぼくは、それがとても恥ずかしかったり、うれしかったりした。

おばさんたちにはそれぞれのサイクルがあって、ほぼ毎日来る人から週に一度くらいの人までいたが、惑星直列みたいに重なるときがあって、そんなときは実ににぎやかだった。重なり合う笑い声の中で、やっぱりわっはっはのおばさんのそれは突出していた。

毎日毎日、母やおばさんたちは、何をしゃべり、何をあんなに笑っていたのだろう。そして、いつの間にそれがみんな消えてしまったのだろう。

仕事でいろいろな住宅街に行くようになったが、ついぞ漏れ響く笑い声を聞いたことがない。どこもしんと静まりかえっている。わっはっはのおばさんは、絶滅してしまったらしい。

「ばかなことをしたと思います。」

郊外の広い家に一人で住まう老人がつぶやいた。若さ故に、そして子どもたちのためにと広い家を求めたが、今では使いもしないその広さをただ持て余しているのだと嘆く。訪ねる家々、どこも似たり寄ったりの嘆息が充満している。

こどもたちの落語の稽古をそんな家に届けられないものか。こどもの声を響かせたいと思われるところがあったらこちらから出かけたい。今、そんなことを考えている。実現すれば、わっはっはのおばさんは息を吹き返すかもしれないから。

ニュース日記　904

中村　礼治

裏金疑惑の背景にあるもの

30代フリーター　自民党安倍派の政治資金パーティー収入の裏金疑惑が岸田政権を窮地に追い込んでいる。

年金生活者　政治資金というのは、国家による富の再分配機能と並ぶ、もうひとつの再分配システムだ。

国家による再分配機能は、生産されていったん分配された富の一部を「持てる者」から「持たざる者」へ分配し直し、貧困と格差を縮小するのが目的のひとつとなっている。「公平」あるいは「平等」の理念がそれを支える。

国家は、社会の諸個人、諸集団の利害がぶつかり合ったとき、それを調停する機関として存在する。言い換えれば、個々の利益、私的な利益を超えた全体の利益、公的な利益を守る機関と言ってもいい。その具現化のひとつが再分配機能だ。

30代　それ以外にもうひとつ再分配システムがあるというのはどういうことだ。

年金　国家による再分配で、自分の稼いだ富を持って行かれる「持てる者」の側には当然、不満が残る。それに対して、「持たざる者」たちは再分配で得た富を守り、さらに増やそうとする。その状態を放置すると、社会は両者の戦場と化しかねない。その争いにルールを与え、惨事を回避する機能を持つのが議会だ。

議会は資本主義の興隆を反映して、資本家の代表と労働者の代表がそれぞれの分け前を増やすためのせめぎ合いの場となった。資本家の代表は「持てる者」から「持たざる者」への富の再分配に抵抗して、「持てる者」の稼ぎを守ることを使命とした。そのために、国家による再分配とは異なる、「もうひとつの再分配システム」をつくりあげた。それが政治資金という収支の仕組みにほかならない。

「持てる者」の代表は「持てる者」からその富を政治資金として吸い上げ、それを使って選挙で多数派を形成し、「持てる者」の利益になる立法を目指す。それに対し、「持たざる者」の代表は労働者の団体から献金をかき集め、それを使って選挙で勢力を伸ばし、「持たざる者」の利益になるよう立法に影響を与えようとする。

30代　両方の再分配システムを比べると、「持てる者」の側がはるかに大規模だ。

年金　その規模の大きさが裏金づくりの余地を生む。このシステムに備わった、「持てる者」の利益を守る機能をより露骨に発揮させるための細工が裏金だ。それは議会のルールを逸脱する。議会は、「持てる者」から「持たざる者」への富の再分配機能を持つ国家と、その再分配に抵抗する「持てる者」の側との妥協の産物でもある。その妥協を裏切る裏金を国家としては放置するわけにはいかない。東京地検特捜部も捜査を始めざるを得なかった。

30代　裏金疑惑の大半が安倍派なのはどういうわけだ。

年金　政権や政党が国民に支持される重要な要素のひとつに「理念」がある。裏金もそれにかかわっている。

東西冷戦と55年体制のもとで自民党が掲げた理念は「自由社会を守る」だった。冷戦の終結と55年体制の崩壊とともに、それは切実さを失って、理念としての力を減退させ、非自民の細川連立政権の成立を許した。

威力の衰えた「自由社会を守る」に代わる理念として「日本を取り戻す」「戦後レジームからの脱却」を掲げて登場したのが安倍晋三だった。

それが国民に一定程度支持された背景には中国の経済的、軍事的な大国化がある。下半身だけ「自由社会」になることによって膨張した中国は、経済大国としての日本の地位を脅かし始めた。それは共産主義によって「自由社会」を脅かしていた国が、自ら「自由社会」に急変することによって、既存の「自由社会」が得ていた分け前を奪い始めたようなものだ。

それには「自由社会を守る」では対抗できない。「日本の分け前を守る」ものでなくてはならない。「日本を取り戻す」「戦後レジームからの脱却」はそれを言い表したものだ。さらに、そこには「分け前を守る」ことだけでなく、中国の軍事大国化への対抗が含まれている。

安倍政権はそれを具体化するために、特定秘密保護法や、集団的自衛権行使の部分容認を含む安保法制の制定を強行したうえ、憲法改正をもくろんだ。それに対する国民の批判をかわすために仕組んだのがアベノミクスだった。それは雇用を増やすことを通じて国民の支持をつなぎとめる効果を発揮した。

30代　話がなかなか裏金に結びつかないな。

年金　借金をしまくることで成り立つアベノミクスは痛みを止めるモルヒネのようなもので、いつまでも続けられないことは自明だった。現在の円安やインフレがそれを実証している。それでも安倍政権がそれを採用したのは、憲法改正までの期限付きと考えていたからと推察される。

安倍政権はこのアベノミクスを魔法の杖のように使って国政選挙で全勝した。しかし、憲法9条を骨抜きにし、軍備の増強を目指すこの政権の一貫した姿勢に国民は警戒心を解かなかった。そのぶん政権は選挙でこれまでにないような無理を重ねたと思われる。そのひとつがカネの大量投入だ。参院選での法相夫妻による大規模買収事件が代表例だ。安倍派の組織的な裏金疑惑もそうした「無理」のひとつと考えることができる。